

幕末の頃、長州藩（今の山口県）の松下村塾で学んだ高杉晋作、久坂玄瑞、その後続く伊藤博文など明治維新の志士たちを多く輩出した吉田松陰は、入門を希望する塾生に「なぜ学問をするのか」とその学ぶ姿勢を問うていたそうです。「本が読めるようになりたい」「世界のこともっと知りたい」と入門を希望する塾生たちは答えます。松陰は「知識を得るだけではなく、学んだことを自分で考え行動に移せる人になりなさい」と応じたといひます。

なぜ勉強するの なぜ学校は行くの

お子さんからなぜ勉強をするのか、なぜ学校に行かなければならないのかと聞かれたことはありませんか。急にこんなことを言われても、親としては返す言葉に詰まってしまいます。それは教育の立場に携わる者としても、「人はなぜ学ぶのかはとても難しい命題」だと思っているからです。

私が小学生の頃は、なぜ勉強するのかなど少しも考えていませんでした。遊びも毎日忙しかったし、家族と一緒に野球やプロレスのテレビを見ては大いに盛り上がる昭和の時代でした。その当時、子どもは学校に行って勉強するのが当たり前、学校は毎日行く所だという考えで育てられていたように思います。嫌なことがあり、頭や腹が痛いと言わなくても休みは何日かしましたが、毎日友達と学校で会うことや休憩時間にはみんなと遊び、勉強したり運動したり、給食を食べながら話をするのはとても楽しかったです。

でも今は、勉強が難しくなる高学年だけではなく、低学年の小さい子どもたちの中にも「勉強はなぜするの」「学校はなぜ行くの」と感じている人もいます。

大人は難しい言葉で「将来自分が困らないため」「自分のやりたいことのために大切」「将来の生き方の選択肢を増やすため」など、大人になればわかると自分の経験をふまえて言います。教師である私も自分の子どもにそう言っていました。「勉強することで得られた『考える力』『考える力の基礎となる知識』『努力をして自分を高める力』が、社会人になったら役に立つ」「これから変化の激しい時代に生きていくため必要なこと」。どれも正しいのだと思います。でも子どもたちにはピンとこない。自分の将来のことなんか分からないし、難しいことを言われても、やりたいことは他にあるし、楽しいことも他にたくさんある。

しかし、本来子どもにとって学ぶことって楽しいことのはずです。知らなかったことを知って面白いし、できなかったことができるようになるってうれしいし、みんなと考えるって楽しい。子どもたちには、そんな学ぶ楽しさを実感できるようにしたい。

学校に行くのは楽しいから行く、勉強するのは楽しいから勉強する。そう感じてくれる学校や学習にしたいと思っています。これからの時代は、学校に行かなくても発達した通信技術によって学ぶことができるかもしれません。しかし、どんな時代になっても学ぶことは必要です。いつの世も自分で考え行動に移すには学ぶことが必要だからです。、と結びましたが子どもにはまだ難しいことかもしれません。

